

# チリ地震津波時の御前崎港

松林治雄(撮影)・田口雄作(文)

Haruo MATSUBAYASHI Yuhaku TAGUTSCHI

日本時間1960年5月23日04時11分20秒 南緯41度西経73.5度 南アメリカ・チリのコンセプション海岸付近のごく浅い深度を震源とするマグニチュード8.75(気象庁)という世界最大規模の地震が発生しました。この地震による津波は太平洋を伝播し地震発生から約22時間30分から23時間後に震源から17,000km以上も離れたわが国の海岸に到達しとくに三陸海岸一帯に大被害を与えたことはすでに読者の皆様ご承知の通りです。

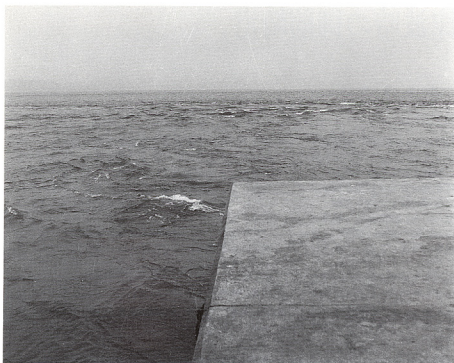
筆者は地質調査所御前崎地震予知観測井の観測協力をお願いしている元静岡県職員松林治雄氏との打ち合わせの中でヒョンなことから氏がチリ地震津波時の御前崎港の状況を撮影しておられることを

知りました。それらの写真は部内資料として一部発表されていますが大半は氏のアルバムの中で死蔵されたままになっていました。早速見せて戴いたところ一部ネガの状態が不完全なものもありましたが、迫力ある鮮明な写真に圧倒されてしまいました。

幸いなことに御前崎港ではこの津波による人的被害はありませんでしたがいつまた同じ様なあるいはそれ以上の大きな津波が襲って来ないとも限りません。そんな警鐘を鳴らす意味においても27年前の写真を公表することは意義あることと思いい本誌の口絵として掲載することにしました。



写真1 最高水位時の防波堤：御前崎港における最高水位は5月24日07時44分に366cmを記録し、東京湾中等潮位(T.P.)との差は201cmで、初動から4時間36分後に出現しています。防波堤に置いてある漁具を家族総出で、慌てて片付け、漁民たちの緊迫感がひしひしと伝わってきます。



## 写真 2

御前崎港の防波堤突端に押し寄せる津波：御前崎におけるチリ地震津波の第一波到着時刻は同日03時08分で15cmの「押し」で始まっています。何の疑問も持たずに防波堤の突端まで行って津波を撮影しましたが、今から考えると身震いがすると、当時を振り返って松林氏はおっしゃいます。



写真 3 平常時の防波堤の状況：前頁の写真と見比べてみて下さい。このような平常時の状態から瞬時に水位が急上昇、そして間もなくまた瞬時にして急下降する恐怖の津波。当時の防波堤は、この写真に見られる長さ1,165mの東防波堤1本しかありませんでした。中央の四角い建物は当時の験潮所です。



写真4

最高水位で浸水した納屋と隣まで海水に浸かりながら後片付けにおおわらわの漁民たち

07時44分に最大津波に襲われ、漁具を収納するための納屋の壁面には、地表面から50cm～1mの高さにくっきりと最高水位の痕跡が残っています。



写真5 岸壁のブロックに残された最高水位の痕跡：ブロックに残された痕跡から最高水位は、岸壁の天端から約1mの高さまで達したことが、はっきり読み取れます。もしこの時この地点に人が立っていたら、津波の「引き波」にさらわれてしまったことも十分考えられます。



写真6

「引き波」によって流される漁具や木材類

「押し波」によって小型漁船は打ち上げられ魚市場や納屋は浸水しました。「押し」に比べて「引き」の方が強烈であったため、浜に置いてあった漁具や木材等は瞬く間に沖へ流されてしまいました。



写真7 最低水位時の御前崎港の様子：御前崎港内は見ると半分以上が干上がり、海底が露出してしまいました。浜では漁民たちが多勢集まって不安気に沖を見つめています。この後も「押し波」と「引き波」が交互に出現し、全振幅が1mを越える現象は24日22時頃まで続いたと言うことです。